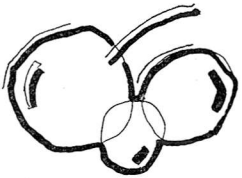
《座談会》

『町誌』から『市史』へ



『町誌』編集委員
館　盛光
藤谷重三郎
宮澤福次郎
岩下伴蔵
高崎伊平
田村四郎
唐沢健一
小野沢博一
坂上洋之

『市史』編集委員
北原進
宮岡一雄（司会）
川鍋幸三郎
新井勝紘
久保田昌希

＊

田村匡雄（市長）
内田和雄（企画財政部長）
編纂事務局

市史編さんは私達の責務

内田（企画財政部長）　本日は、先生方にはお忙しいところお集まりいただきありがとうございます。

この会は、昭和三〇年代に『福生町誌』を編さんいただきました先生方と、今回の市史編さんの担当をしていただいております先生方との座談をしていただき、今後の編さんの参考にさせていただきたいと思い、ご多忙中のところご参集いただいたものでございます。本日は時間の許す限り、いろいろご教示を賜りますれば幸いと思います。

それでは田村市長よりご挨拶を申し上げます。

田村（市長）　みなさん、こんにちは。今日お集まりの先生方には、以前から大変お世話をおかけしておきなが

ら、ご無沙汰しておりまして誠に申しわけなく思っております。ただいま、部長から話しがありましたとおり、市史編さんの座談会のために、大変お忙しいところお集りいただきまして、まことにありがとうございます。

福生市も今年で市制一五周年を迎えるわけでありますが、市史の編さんをという話しが出ましたのは、四、五年前から、議会を通じて要請がございました。私も以前には、皆様方が編さんされました『町誌』もございますしと、考えていたのですが、『町誌』発行後にも史料の発掘等もあり、これらの事実をおり込んで、新しい市史を編さんすることも現代に生きる私達の責務ではないか、また行政上も大変有意義であると考えまして、一昨年度から議会等のご協力をいただいて、着手したわけでございます。

しかし、ひとくちに市史編さんの作業と申しましても、大変な作業でございます。なかでも、歴史的史料や研究資料は、編さんに欠くことのできないものでございます。そこで、『町誌』の編さんにたずさわりました諸先生方の貴重な体験や知識、また研究成果を、ぜひこの機会にお聞かせいただき、編さんに役立たせたいと考えております。こうした趣旨をご理解いただき、よろしくご協力お願い申し上げます。

内田　今日の座談会につきましては、福生市史代表編集専門委員の北原先生の司会によりまして、進めさせていただきます。

それでは先生、よろしくお願い申し上げます。

北原　ご紹介いただきました北原でございます。今日は大変お忙しいところお集まり下さいまして、まことにありがとうございました。

昭和三五年一〇月に出ました『福生町誌』から、二五年も経ちまして、市史の編さんが始まったわけですが、その頃の『町誌』をふり返って見てみますと、私どもが直接学び、新しい市史に利用させていただくといいますか、研究をさらに進めるための手がかり、足がかりが非常に多いのでございます。

そこで、『町誌』のための研究や執筆にあたってのいろいろなご苦労や、『町誌』では実現できなかったというようなこと、また新しい市史はこうあるべきだ、ということなどがあれば、ざっくばらんにお話しいただき、忌憚のないご意見や思い出話しなどをいただいて、いろいろとご注意を賜りたいと思っております。

（このあとの市史編集専門委員の紹介は略しました。なお出席は北原・宮岡・川鍋・新井・久保田の五委員で、欠席は和田哲・河上一雄委員）

『町誌』は教師がつくった

唐沢　町制一五周年を記念してまとめようという考えがありましたね。編集委員の構成につきましては、各学校の教員で、社会科担当の教員が出る。その他に、地区に長くいて、その地域をご存知の方に出てもらおうということで推せんしていただいて、メンバーが集まったわけです。限られた期間で、町制一五周年までにやれということが決まっていまして、私どもは、それなりに大変努力をしたということです。

北原　それでは、今日、出席の九人の先生方のその頃のお仕事と、町誌にかかわられた動機、あるいは、発想などを、簡単にお話しいただければと思います。舘先生からお願いいたします。

舘　私は、座っても立っても舘でございますから（笑）、座ったままでお許し願いたいと思います。

私は、当時、福生三小の校長をしておりまして、実は、三小、足かけ一〇年校長をしておりました。その中間の時代に、この町誌の編さんというものが行なわれたわけでございます。ただ私の場合は、福生の学校へ勤め始めたのが昭和六年で、その後やめるまでに一小、二小、それから三小と訓導、教諭、教頭、校長と二〇年程おりました。会代表といえば大げさですが、中学の大先輩の岡野校長先生が大将で、私どもは、この方の後につきまして、みなさんの多少世話係ができたらいいという立場でございます。まあ、お茶くみなんかのような程度の仕事でございます（笑）。それと、今日、よんどころのない用事ができまして、皆様のお顔をみるだけで失礼いたします。

左より舘，藤谷，宮澤委員

北原　それでは、藤谷先生お願いします。

藤谷　私は、青梅の小学校に一九年ほどおりましてから、福生に転校してまいりました。大きな交通事故を青梅でやりましたので、福生の便利な小学校が良いだろうというわけで、来たばっかりだったんです。

戦後、社会科というのができましたが、その社会科が、何が何やらわからないので、少し調べたいと考えておったのです。その頃ちょうど、名古屋大学の教授をしていた重松鷹泰先生が私のところに、ずっと戦後いらっしゃいまして、何か先生のお手伝いができたらというので、原稿の整理や、カリキュラムなど盛んに作っておりました。

それから、こちらに転校してきたのですが、一つも福生のことがわからないのですね。特に、三年あたりの社会科を教えようとしても、神社やお寺にしても、人口、学校、消防にしても、何もわからない。わからなくては、子供に教える事ができない。それでまあ、多少でも知りたいなと思っておったわけです。町誌編さんでは、舘先生のお茶くみではありませんけれど、その次のお茶くみくらいでした。しかし、福生一小の校長をやめるまで、社会科には、何かと縁がありました。町誌にも多少お手伝いはしましたけれども、問題は、『私達の福生』、小学校の子供にやっている副読本ですが、これを何とかして、作りたいなあということが、私の考え方の根本にあったわけです。子供達にどんな副読本を作ることができるかということに、力を尽してみたらどうかなと考えていたので、専門的にどうのこうのということでは、なかったのです。子供が多少でも、福生の歴史を知ってくれたら幸いだなということで、皆さんから教えを賜ったというのが実情ですね。

北原　ありがとうございました。それでは、宮澤先生お願いいたします。

宮澤　私は、旧姓大野と申します。昭和一七年に、神社の宮司の宮澤の家へ養子にまいりました。八百年から九百年近く続いている家を継いだわけでございます。

第一小学校へ昭和二四年から三九年まで、一五年間奉職した訳です。町誌ができる頃は教頭をしていましたが、やはりお茶くみ程度だったかも知れません（笑い）。ただ、第一小学校では、田村先生が、社会科を熱心に研究されておりましたが、一校から二名ぐらい出てくれ、というお話しがありましたので、私も学校関係の資料を集めたというようなことがございましたので、仲間入りさせていただいたわけです。唐沢先生とか、あるいは、木村東一郎さん、坂上先生、小野沢先生などが、町誌の計画をし、まとめの段階まで、やってくださったんではないかと思います。夕べもひと通り、目を通してきたのですが、私もちょこちょこと原稿を書いたことを、思いだします。

北原　次に、岩下先生いかがでしょうか。

岩下　昭和三五年当時は、福生へ勤めて一七年目で、福生第二小学校におりました。昭和一八年に福生第一小学校へ配置されまして、昭和一九年に海軍の横須賀海兵団に入隊したのですけれども、入隊まで三月から五月まで二か月間あるんで、担任するわけにもいかず、校長が好きなことをやれっていうんで、土地の古老の話を聞いて、ガリ版刷りで残していったのです。一年三か月経って復員して、その続きで聞いたのをカードにしていたのですが、社会科の勉強が盛んになって、資料を借りにくる高

校生などがおりましてね。そのうちに、資料がだんだんなくなってしまったんです。それで、スポーツに転向して熱中してた時期に、町誌の編さんということになり、入れた方がうるさくなくて良いと思ったんで（笑）、入れてくれたんではないかという記憶がございます。

北原　「福生誌覚書」などをみますと、先生の「昔の福生」などという原稿を拝見したりできます。

それでは、高崎先生。

高崎　青梅にいまして、昭和三四年ですか、福生の四小が独立するというので、福生の方に戻していただいて、藤谷先生のもとで、社会科をやらしていただきました。何分にも、資料が乏しいので、だいたい古老の話を中心にして、資料集めをしようというようなことで、お手伝いをしたという様な形なんですけど。この土地で育ったものですから、子供の頃に聞いていた様子だとか、そういうものを思いだしてみて、裏づけになるような本が欲しいな、という感じがしていたわけです。あれこれ聞いてみたわけですが、資料などの解釈もできないような状態なんですけれども、何とかして古老の話を裏づけにして、こういうふうな福生だったということが、子供に教えられたらいいな、という様な考えで入れていただいたのです。

北原　次に、田村先生お願いします。

田村　当時、福生の第一小学校の教員をしていまして、社会科の担当をしておりました。それから町出身だということもありまして、出させていただいたのですが、当時は、小学校で教える社会科の資料が乏しかったので、何とかそういうものもわかればいいな、というような気持ちで仲間にしていただいたのです。資料については、各学校の先生方が研究されたものを借用したりして、原稿化しましたが、校正とか訂正とかで、木村東一郎先生が、徹夜をしたりして、たいへん苦労されたという話しを聞きました。

まず郷土を知ること

北原　それでは、唐沢先生お願いいたします。

唐沢　私は福生第二小学校に昭和三二年に来ました。その数年後に福生町誌編さんの話しが出ましてかかわったのです。

あの当時は、福生という地名が大変よろしい地名で、方々から照会があったり、見学があったりして、観光協会が困ったという事があったそうです。そこで町の紹介に都合のよいようなもの、つまりパンフレットができればいいというような案もありまして、一番いいものを作ってくれというようなことが、最初の発足のような気が

します。したがって、最初の方は一五周年という含みもありますが、まとめあげたものを今後にどう生かすかというようなことを考えながら始めたわけです。偉い先輩が皆お茶くみですから、僕なんかお茶買いの方です。（笑）今思えば、難しい文章など、みな読めなくて、戸惑ったことの方が多いものですから、おこがましい話などできないのですが、編さんへの思いは大変なものを持っていました。これができあがれば、福生市の将来の展望も全部わかるというような思いだったのです。

北原　小野沢先生、どうぞ。

小野沢　私は新卒二三年から二小と一小で一七年間、昭和四〇年まで福生にお世話になりました。それから二〇年になるわけです。

だいたい、歴史については学生時代から興味と関心がありまして、戦後、地方史が澎湃としておこり、研究熱が高まりました頃、古文書の指導を受けながら、好事家の端くれの一人としてやっていたのです。そんな中で坂上先生などと一緒に何かやろうじゃないか、ということで参加したわけです。専門的な学識というものはなかったのですが、古文書をいくらかかじれたという点で、わりあい都合がよかった。今でいえば地域研究の教材化ということになりますが、まず郷土を知ることが先決だということを考えながらやってきたということで、無我夢中でした。まだ三〇歳そこそこで、かけだしの頃ですね。あちこちをとび回ってやったわけですが、当時を考えますと汗顔のいたりです。書いた物が本物であるかどうか、また信憑性があるかどうか、原点に戻ってもう一回熊川も洗い直してみて下さい。

北原　それでは坂上先生。

坂上　私は学校を出まして、昭和三〇年ですけれど、初めて奉職したのが福生第二小学校です。一二年間おりました。ちょうどあの頃、福生第二小学校は、岩下先生、唐沢先生、小野沢先生など立派な先輩が多くおられました。その先輩達の導きがありまして、私も多少学生時代に、地方文書のゼミに首を突っ込んでいましたので、先生方の後を金魚のウンコのようについてやってきたわけです。当時は、まだ地方文書の解読がままならなくて、やたらと枠があって、所々が読めているという感じでした。小野沢先生のように、その頃から読めていれば、もうちょっとましな記録が取れたのではないかと後悔しています。記憶をたどってみますと、ほとんど、旧熊川村の旧家の文書をいじったということになると思います。内出の石川さんの文書、これは文書目録に取りました。内出の内出家、真福寺の裏の内出さんの文書、鍋ケ谷戸の野島茂雄家の文書が少々、牛浜の渡辺さんの所にも文書が少々あったでしょうか。幕末の大洪水の絵巻物ですね。石川

さんでは、例の秋葉講の近くの信州の伊奈の坂部とか、遠州のあちこちの方の、小川村の小川さんあたりが勧進元になっていますが、幕府の請負業としてその材木の切出しの道中日記などがありまして、面白いなと思いました。

旧家の土蔵をあけて

北原　資料調査などの苦労話に入ったところですが、先生方のお話しをうかがいますと、直接現地にある地域資料から歴史を発想して研究を進めていくという作業と、もう一つ町誌を作り、それが教育資料として、直接社会教育上の、あるいは副読本などを作っていくという関心が、非常に高いようにお聞きしたわけです。町誌の最後に福生町教育資料がまとめられており、こういった教育史・あるいは教育資料をまとめておくというのは、先生方のご関心もあったわけでしょうか。

藤谷　それはね、教育資料が役場から出てきたのです。その頃役場は新庁舎にするらしいというので、すべて燃やしてしまう恐れがある。廃棄してしまうがどうしたものだろうかという話しが私のところにきまして、それはもったいないからとっておけば、何かの時に活きるんではないか。何人かでいって中を捜せるだけ捜して、必要なものをみな取ってきたらどうだということになりました。それで、それらを写したわけなんです。ですから、そのとき燃せば、それで全て終りだったのです。何かの役に将来立つんではないかと、日曜日をつかって三、四人で小屋を見ましてね。大切そうなものをとっておいたのです。

北原　役場にしましても、あるいは旧家にしましても建て直しをしたり、片づけとなると、古いものをどうしても捨てたりすることがあるわけですけれども、物によっては、その時、かけがえのないものがなくなっていくということが……。

私どもの委員会でも資料集の編さんを、通史全体の中の一つとして考えております。それから、もう一つは、これはまだ構想ですけど市史ができたあかつきには、もう少しコンパクトに、どの家にも置いてあるようなハンディな本として、福生の歴史の概説書を作らなくてはならないと思っています。

次に古文書の調査とか、古老からのお話しをうかがうという民俗調査というのでしょうか、昔話だけではないいろんな生活の調査などもあったかと思うのですが、そ

の辺の調査の話しに向けていきたいのですが。はじめに旧家の調査などについての思い出とか、こういうことをしておいた方が良かったのではないかというような事についてはどうでしょうか。

坂上　熊川神社の野口さんのお宅にいって、社殿を見たりしていました。その頃、木村東一郎先生の引きで明治大学の煎本先生が来られて、目録をきちっと作られたと思うのです。私などはろくに古文書も読めませんので、それをどういうふうに活かしたらよいのかまったくわからなかったのです。例えば真福寺の聖護院関係の修験の半沢坊なんていうのが出てきてました。桑都日記などには詳しく出ていたのですが、そのことについては前に五日市におられた片山さんが追跡されたことがあります。だいぶ後にもう一度、片山さんと一緒に内出さんのお宅にいって、土蔵を開けてもらった覚えがあります。あの頃、そういう目があったら、きっと良かったと思うのですが。後は稲村坦元先生が神社仏閣、なかでも仏像関係を全部鑑定して下さって、仏像の首を引っこ抜いて、これは室町だなんていうんで、それを一所懸命メモしたのがあるんです。ただ、写真も撮らなかったのです。それから、内出の真福寺ですが、内出家にはたぶん直右衛門とかいう名主のお墓を記録にとったものもあります。

後は近代に入りましての産業、とくに蚕糸業。熊川に片倉製糸がありますね、日本の五大製糸のうちのひとつ。それ以前は、幕末から明治の中期位まで、釜数が五つ位の非常に家内工業的な、しかも一応何々社と名前のついた製糸工場が、熊川あたりに続々とでき、高崎治平とか羽村の下田伊左衛門らの指導でやっていました。小さいながらも玉川社というのを作って、工女の雇入れを合同でやっていました。それが、昭和初期の金融恐慌や何かで、だんだんああいう大きい会社の片倉などに吸収されていくわけです。その過程がよくわかりましたので、もう一度、その辺をきちんと調べたら、面白いものができるだろうなあという気がします。

北原　八王子方面との取り引きの資料などもぼつぼつでてきておりますし。

坂上　後は玉川上水関係。とくに明治の二〇年代の熊川分水のいきさつなどが……。その関係について、原文書の記録としてとってあります。

小野沢　補足します。今出ました熊川分水の上申書は、野口さんの家にありますね。これはどこかに写してあると思うのですが、表題は忘れましたが。要するに玉川上水を分けてくれというものです。

坂上　その写しは、私が持っています。

小野沢　それから、中西の野島茂雄さんのお宅に検地帳、名寄帳、村方明細、宗門帳等々がかなりありますよ。そ

れで嬉しかったのはね、玉川上水の失敗の跡として水喰土がね。現地の写真がどこかへいってしまって、もう掘割りもないようですね、それが検地帳にちゃんと出ているんです。水喰土という地名が。そのときは本当に狂喜いたしましたけれど。それは町誌を作った後からだと思いますよ。

それから、残念ながら、慶応二年の農民一揆ね、結局、福生に関係する史料が、ほとんどでてこないのです。第一小学校で『九十周年誌』を作ったときにも、何回かお邪魔しているんですが。虫干しの時にいったのですが、チャンスがなくて。酒樽を切られたというような事実があるんです。ところが、その裏付け史料が福生から出ないんです。熊川の石川彌八郎家では、銀しゃりとお酒などで歓待をして、むすびを作って出してやったりして、ご苦労様、世直しご苦労様という形で対応したわけです。

大神の中村家は難を逃れており、宮沢の田村金右衛門などの酒屋は倒壊されていますね。現在、後裔が郵便局をやっているようですけど。その点福生は、一揆に関しては具体的な裏付け史料がないんです。これは今後の大きな課題だと思うんですけど。村山などには顕彰碑がいくつかありますけれど。

後は内出さん。羽村から四谷の大木戸までの玉川上水の分水が全部出ている絵図がありますね。全部写したのですが、どこかの展覧会に貸したら戻ってこないということです。教室の横だけでは貼り切れなかったという記憶があります。八八ぐらいの橋が、大木戸まで全部出ているんですよね。寛政の頃の写しだと思います。それから熊川分水では、角屋（かどや）の史料なども思い出されます。

北原　おそらく、新宿の浄水場にあります玉川上水絵図の元図か、何かを写したものだと思います。

小野沢　それから千人同心が一二代将軍の上洛に従った時の史料。横田寿照さんのところの絵日記ですが、横田さんの先代が千人同心の班長です。伊藤好一さんを案内した時にみせてもらったのです。

北原　横田穂之助の日記は、最近、福生古文書研究会が復刻しました。長州征伐では戦っています。そのあと四国を経て帰るというものです。

積み残しの調査

北原　町誌と私どもの市史との間に、町の中では研究会ができ、町誌を発端にして、それを手がかりに調査がぽつぽつと進められているわけです。ですから町誌には書い

てなくて調査だけでとどまっているもの、その後の進んだ研究成果、あるいは私どものこれから始めるもの、それらをいわば総合する道をつくらなくてはならないと思っています。

小野沢　そうですね。その辺をなんとか研究して欲しいと思います。

宮澤　古文書の会ですか。それと先生方の関係はどうなっていますか。

北原　直接、組織的にはないのですが、担当の委員はほとんど文化財関係の委員をかねてもいますので、人的には始終交流できています。

岩下　横田先生のところの古文書は、町誌の資料として残しておいたと思うのですが。町誌編さんは主に中学でやったんだよね。あそこで、いろんな資料をとっておいたはずなんですが。それが散失してしまっているか、どうですか。その中に横田先生の古文書もいっしょにとっておいたのですが。

小野沢　木村先生に聞けば分るけど。

新井　今、熊川の文書の話しが出ましたけれど、福生の家はどういう家が調べられたのでしょう。

岩下　私が知る範囲では横田先生が出して下さったことだけで、後は知らないのですが……。

左より岩下，高崎委員

藤谷　田村半十郎家にもいってみたのですが。高崎先生ともいっしょにいったことありますよね。どうしても、いそがしくて、だめなんですよね。

宮澤　やはり、ああいう家になればなるほど、公的なものと世間の目にまだ触れていない物が混在していると思うのですよね。福生の歴史にとっては、田村家の文書は一番重要であろうと思うんだけど。

藤谷　養蚕で有名な高崎治平さん。あそこも高崎先生といっしょにいって二時間ぐらい話しをしましたかね。あまり詳しいことはわからないようでしたね。宮本神主さんのところへもいきましたが、歴史的なことについてはよく知ってもいないようでしたね。

小野沢　伊藤好一さんを私は案内して歩いたのですけれど、例えばメガネ屋ね。あそこの文書を見せてもらったことがあります。それからワラ屋へ行ったな。近代が一件あったのは井上さんの家だったかな。

藤谷　長徳寺にはいっしょにいったけど、あの法丈さん、あまりわからなかったね。

唐沢　思い出というか、取りこぼしがあったのは、やはり内出さんの家の文書ですね。あの家は代々の文書を蔵に積んじゃってあったんで、寛文の検地帳があったのです

が、雨にあたってくっついちゃってはげないのですね。まだそのままであると思っているのですが。

それから里修験の問題。あの頃、修験の問題はあまりよく分らなかったものですから、文書はそのままにしてしまってあると思うのですが。近世以後における修験の問題は、福生ではもう少しやらないといけないと思うのです。その辺はまるっきり穴があいている。

さっき坂上先生がちょっと触れましたが、聖護院の文書がかなり保存されているように思います。それを文書の項目だけを記録して内容をあまり考えなかったのは、今にして思えば残念です。あの文書は、民間信仰の関係で大変意義ある問題が出てくるだろうと思います。

それから昔の郷制が中世になって、だんだん壊れてくる過程ですね。中世関係でいちばん重きをおいてやったのですが、何せわからなくて。今度、もしやるとするならば、古代から中世に移りかわる頃の十郷がどうわかれていくかという問題をやってほしいですね。

それからもう一つは、「野島兵庫助」という名前が、明治期から多く出てくるのですが、究明がまずかった。中世から近世にかけて熊川にいたように思えますが追求が不足でした。それから滝山北条から出た文書が石川さんの家にあります。その意味でも私家文書をもう一度見直す必要があります。それから民間伝承のような問題ですね。なおざりになっている気がしますね。その辺が前の町誌では、ぽこっと抜けているのです。それから文化を語るあたりがちょっと抜けているという感じがします。その事はここにいるメンバー全部が感じていたのですが。そういっちゃあ僕らの仕事をごま化すわけになりますけど、一五周年ですか、その記念に向けてという至上命令がありまして。その点で積み残しは多かった。

中世の福生の生活は

北原　現在の市史の私どもにも至上命令がないわけではございませんけれども。（笑）

久保田先生、ちょうどいまのご指摘、修験の問題にしても、それからいちばん文献資料の乏しい時代、例えば古代あたりになりますと、全国的な資料の中から出てくる面と現地の資料とですね、あるいはいろいろな他の地域にある資料も見ていかなくてはならない。その点で久保田先生どうですか。

久保田　まだ始めたばかりで、町誌をおやりになった先生方から盗みたい心境が強いのですけれども。

中世の同時代の古文書というものが、ほとんど無いということが言えるわけですが、その点では福生に限らずどこでもそうですので福生を中心として中世文書の採集

に努めながら考えていこうと思っているのです。例えば、石川家にある氏照文書ですけれど、前の町誌では天正一三年とされていますが、その後の研究でどうも天正一三年よりは二めぐり前、二四年前に出された文書と考えた方がいいのではないか。つまり永禄の四年ですから、上杉謙信なんかが南下してくるときの物として考えた方が良いのでは、と考えるのですが。それから修験の問題、これは宗教史のメンバーを加えて、大いに考えていかなければならないことだと思います。また寺院や神社の文書の調査が不足しているとおっしゃいましたが、この辺も大いに考えていきたいと思っております。

私がとくにお聞きしたかったのは、昭和三五年の段階で中世の項目に、「中世の福生の生活」という項目をもうけられておられる。その辺は、どういう話しの中で出されたのか、また特に資料もないところをいかにお書きになったか、その辺の発想の点をお話しいただきたい。その辺の苦労を多少お聞かせいただいて、激励していただけば（笑）、ありがたいことですし。

それからあとは、南北朝の問題でいきますと、例の牛浜あるいは石浜合戦。また、最近立川先生などがおっしゃっている九州の佐賀に移住していった熊川氏の問題ですね。こういった点をどこまでわかるかわかりませんけれども、もう少し着実に裏づけられるような形で理解していきたい、と考えているわけなのです。「中世の福生の生活」について、何か激励していただければ……。

唐沢　あれは私が書いたと思うのですけど、カンで書いたのです。（笑）

北原　「中世の福生での生活」というような項目のある市史は、めったにない。最近でこそ、中世の民俗学という項目が出はじめましたけど、昭和三五年段階では、非常に画期的です。

唐沢　神社を中心にして一般村落があるという観点から、神社資料を使ったという程度なのです。熊川神社が中世の頃に出来たということを、都の文化財の人がいってました。稲村坦元先生が来て、神社やお寺をまわったのですが、そのときにあの先生独特な方法で、本尊様のくびを抜くわけです。「抜ける本尊は中世だ」という方法で、全部歩きました。偉い先生が来たというので、あの頃は本尊のくびを抜かしたのですね。薬師如来のすそがどれぐらい下がっていれば、何年頃のものであるというような、鑑定眼を教わったのです。

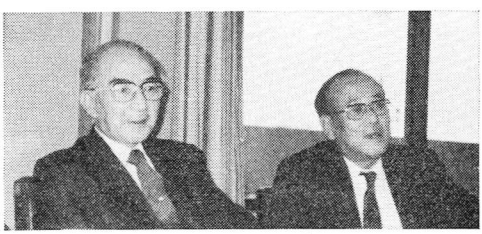
それで、稲村坦元先生と二、三回歩いているなかで、

いろいろ教わりながらやったのです。

それから、例の武蔵野合戦における牛浜の問題です。あそこに碑が建っているのですね。たしか多摩の俳句を作る会ですか、昔から石浜の合戦はここであるという伝承がありますので、その伝承をもとにしたのですね。あれは宮澤先生に書いてもらったのですが、菊地山哉先生が、牛浜ではないという意見を持っていまして、そのことで、野島さんの家で座談会を開きました。われわれ、編さん委員全員で話を聞きましたが、あの方はまことに年の割に頭がさえてましてね、武蔵野合戦は、いくいっかにあってと記憶されており、多摩川は渡らないというご意見でしたね。したがって、私らのメンバーは相当まいっちゃったんです。でも、「私の方はこう考えます」というふうに申しましたところ、「地元はそうでしょうが」といわれたのです。何だか、いまだに、例の武蔵野合戦、尊氏敗走の場所は、東京都の資料など見ましても二つあるように書いてあります。府中の菊地山哉先生は、例の『義経記』を引いているのですね。我々としては土地に伝承があるならば、土地のことを書くべしということで、大きな花火を上げてみようかということになったのです。史料不足はあるかも知れませんが、尊氏が渡ったのは福生の牛浜であるという説を出したのです。

北原　菊地先生は古くから東京史談会を主宰されていて、多くの研究者を集めて、毎月研究会をやっておられました。大変議論好きで、通史にはあえて反対するというところも時々ありました。

疑問が残るにしても、あるいは何もすべて福生からということではなく、客観的に福生の牛浜とそれ以外の地域の諸説を比較していくことが、なされなくてはいけないのではと思いますね。



左より田村，唐沢委員

福生ということばはどこから

唐沢　古代末期からの小川という一族ですが、鎌倉の御家人として仕えますが、その小川氏の子孫が鹿児島へいきました。小川氏と関係のある家に系図があって、その系図に福生というのが出ているんです。僕らもびっくりしたのですが、その系図の先の方の信憑性は、まったくはないのですが、いちばん最後は、はっきりしているのですね。今度中世を考える場合は、ぜひ触れてほしいと思います。

久保田　唐沢先生が鹿児島へ調査にいらしたのですか。

唐沢　僕は、いきませんでした。ただ、全部系図は持っているのです。その家がね、このあいだ聞きましたら火事にあって、焼けましてね。

久保田　そうすると、先生が持ってらっしゃるのが現在、唯一のものですか。

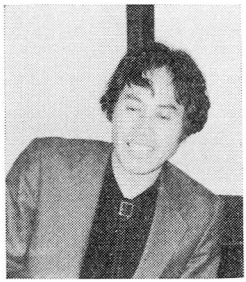
唐沢　原本を写したものですが。

坂上　写真を撮影していたら途中で、「福生」というのが出てきたようなのです。

唐沢　福生市文化財審議委員の立川さんがいったらしいのですが、火事で焼けてしまって家がないというのです。ともかく奈良・平安朝末期に福生という地名を名乗った武士が、ここにいたことになります。西多摩郡の町村名を苗字にした人々の子孫がどこかに残っていて、思わぬ資料を持っている事がわかりましたね。小川一族の一人が愛媛県にいってますが、そこにいってみましたら、確かに残っているんです。「我家の先祖は、昔、武蔵国の西の方から来た」というのを、話した資料があるのです。だから、この辺のメンバーは鎌倉の御家人で、方々へと飛ぶみたいですね。向うには残っていて、本家の方には何もないという、妙な感じがします。

北原　現在残っている古い地名と同じ苗字の方が各地におられるというのは、他の地域からもここに来て、そのままずっと残っておられる。そういう二面の調査というものは必要でしょうね。少くとも熊川とか、牛浜とか、この地域の古い地名の起りとか、あるいは地名自身の研究と、それともうひとつは、村役人というふうに限定しないで、旧家の研究というのが必要だと思います。

熊川の支配者は誰か



坂上　他の市町村史にも多少関係しているものですから、特に福生の場合感じたのですが、家康が関東入部しまして知行渡ししますね。当時は在方に旗本、御家人も多く住んでいたので、一両日のうちには江戸城に入るということで、そういった古い形態が熊川の内出、真福寺の周辺で感じました。〃地頭屋敷〃とか〃地頭井戸〃なんていう名の伝承が、昭和三〇年代に残っていましたし、旧道が今もそういう感じですね。長塩の娘のお墓なんていうのが福生院の境内にあるという。羽村や五日市、秋川ではそういう感じはもたなかったのですけれども、熊川については、田沢さんとか、内出さんなんかのところも含めて、そういう初期の支配者の居住していたような感じがしています。元禄ぐらいで、みんな

引き揚げてしまいますが。

北原　私が今の先生のお話しで思い出しましたのは、地頭屋敷、地頭ばやし、地頭の墓といったものが割合に残っているのは、狭山丘陵の周辺にはいくつかあるのです。おっしゃるとおり、天正一八年に入部してすぐの頃は、馬でとばして、朝、出勤ができて、翌日ぐらいには帰ってこれるというところに配置された旗本たちは、百姓たちを見ながらそこで生活したわけで、しかもお墓も置いたわけですね。二代、三代の頃になりますと、寛文の頃からでしょうか、江戸のお寺に墓地を移すようになってしまう。それでも古いお墓は新しくしないで置いてあるところが割合にあるわけです。たしかに、福生市にはございますね。

唐沢　八高線の用土という駅の近くにお代官という家がありますが、長塩長五郎と関係があるようなのです。あのときは忙しくて、その家なんか調べませんでした。当主はよく知っていて親戚のような事をいうのです。それで聞きましたら、長塩氏というのは武田の御家人で、江戸期になって熊川を持っていたというんです。関係文書があるようなのです。今度もう一回見たらどうかという気がしますね。

北原　在地支配ですね。

唐沢　内出という地名のところに、内出さんがいますが、城郭的な屋敷だと思うのです。内出というのは、中世の城郭を意味しているという説もありますが、あまり確証がなくて、控えていたのですが、この頃、急に確証を持つようになったのです。〝うちでる〟というので、開拓ということを考えていたのです。自然の地形をどういうふうに使って家をつくり、屋敷をかまえていたのか。今度は取り上げてみることが必要でしょう。

北原　村の形成ということですね。

久保田　どの位の規模で残っているのですか。

唐沢　今はだいぶ変っていますがコーナーの家が多い。カギの手のかたちです。内出という政策上の名前以外に村落における土豪の性格ですね。一方は多摩川を持っているのですから、あと自分の回りだけを囲えばいい。一つの大きな力を持っていた人が住んだ場所だろうということは推測できます。

久保田　何か、堀を想定するようなものが。

唐沢　堀はないですね。

坂上　石垣ですね。昔は地頭井戸なんというのがあったところです。

久保田　先生方のおっしゃった「物で考える歴史」というものを中世なら中世なりに書かなければならないと思っています。

唐沢　子供に教えるにはああいうものが一番よいだろう。

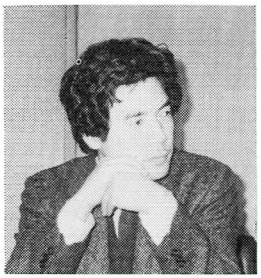
ただお互いに不勉強ですから、それが学問的にどうこうということはできませんでした。

久保田　とにかく素材を提供しておくということも意義のあることですから、今後やはりそういう点を考えていくように努めたいと思います。

坂上　あと、あの頃の文書が残っているとすれば、例の多摩川の河川敷の開発の、下河原水田ですか、あれは幕末だろうと思うのですが、その辺の究明が面白いんじゃないかと思います。それと例の高崎さんが見つけた、向うの村との地境の問題。

現代を後世に残せ

新井　私は近代ということですが、町誌を見ましたら近代という項目がないのです。すぐ、現代の福生ということになってしまって、近世から現代へととんでいるんです。その辺はどうなのでしょうか。また、通史的に書いていないので、明治・大正・昭和の福生の実態というものがとらえにくいのです。その辺は、何か編集上の意図があったのでしょうか。歴史の「史」ではなく、ごんべんの「誌」になっていることとかかわると思うのですが。



唐沢　とくに避けて通るというのではなくてね。何となく抜けたといえば、抜けた、そんな所です。

坂上　指導された先生が、横浜市大の鮎沢信太郎先生で、地理関係の先生で、そういう指導があったのだろうと思いますね。我々の力も不足していましたので。『鶴川村誌』なんていうのを参考にした覚えがありますが、町誌は他の町村に比べても先駆的だったですね。

唐沢　何が町誌であり市史であるということよりも、常にこれをつくれば何か、先がわかるんじゃないかという程度だったと思うね。あとは自分の書きたいところを書いてみようということでした。それを編集委員がつないでいこうと、というぐあいですね。案外この方法がけっこうはやったものです。始めから項目を作って、そこに人を当てるという方式よりもとにかく自分の知っているもの、自分が書けそうなものをあげていけば、それが全貌を語るものになるのではないかという想定です。

坂上　一面でいえば、終戦直後新しい教育というのでしょうか、社会科が中心になりましたですね。その延長にもあると思います。社会科学習の延長上の一つの所産だというふうにもとらえていいのではないでしょうか。『福生町誌』以後に、いわゆる市史、町史のきちっとしたものが、出てきたという感じがします。

唐沢　最近の市史というものは半分は学問が要求され半分は市民の期待にそう。こういう相反する二律をもっていますね。一般市民は自分の関心のある所しか読まないですね。学問的にも要求されますから書く人はだんだん学問的にもなっていく。したがって市史、町史というものは研究者だけが見るものになってしまうのです。それを市民の関心をどこでどうして埋めていくか、これがやはり市史をつくる大きな課題だろうと思うのです。実際、市民が一番知りたいことはわからないんですよ。

田村　稲村坦元先生が、お寺の調査に来られた時、私はバイクに乗ってたのですが、しかられました。こういうときには歩いていかなければいけないと。たとえば先生は農家脇の竹やぶへ入っていってそこのゴミ捨場から明治か大正頃の手鏡のふさを拾ったこともあります。そのとき稲村先生が「現代を後世に残せ」という話をされたのです。町誌の中に入る資料と、入りきらないものとがありますが、市でつかんでいる統計資料とか、あるいは各種団体の統計資料とかを別冊に残しておいていただいたらよいではないかと思います。私が子供の頃、福生は結構、剣道が盛んだったのです。八王子の加住の方に道場があったらしくて、福生からも入門している者がいるんです。そういった近隣の資料もみていかなければと思います。

小野沢　私も本当の好事家の一人で、別に学問的に構想できない一人なんですけれども、どうなんでしょうね。私も各市発刊のもの、ほとんど集めてありますが、現場の教員としましてね、副読本と対比してみるという人が一人もいませんね。教師が地域を知らなきゃならない。それが副読本など若干の解説だけでこなしているということがあります。教師自身がわかる市史、一般市民に手頃のもの、もっと愛されるようなもの、難しくないものをつくるべきだと思います。八王子なんか上・下出しましたけど、校長室に大切においといても、あまり利用されてもいませんね。それには庶民向けのものが必要なのです。身近な過去を知るもの、子供達の歴史意識に働きかけるもの、あるいは独自の読み物のようなものでなければいけないと、ずうっと感じているわけです。特殊なものしか目にふれないということは非常に残念に思います。

　坂上さん来てからでしょうか。郷土クラブを組織しましてね。教室の中ではおもしろくない。じゃ外に出て見に行くべえじゃねえかということですね。ひき連れて見に行ったところが、福生院の共同墓地から青石の塔婆が出て来たんです。これは板碑だったんですが。学校へどんどん運び込みましてね。その後、それらは福生院へ戻しましたけれど。そんなふうに、興味のままにやったものを書かせてもらってたわけです。

北原　専門家がやさしく書こうとしても、ある種の限界が

あったりするわけですが、私どもとしては、できるだけ市の内外の、いわゆる、専門家でない研究者もふくめて研究会的なものをやっていきたいと思っているのです。調査なり、場合によっては執筆などもやっていただくことが考えられないだろうか、あるいは、講演会とか、公開研究会とかも考えられないか。それから、一種の『市史研究』というような小さな雑誌を、年二冊くらい出していこうかとも思っているのです。いわば、編さんの過程を随時、市民の方々に見ていただくことなのです。それは、論文ばかり並んでいるというのではなく、なるべく皆さんに読んでいただけるようなもの、また市史に注文をつけていただくというようなものにしたいなあと思っているわけです。

小野沢　部長さん、予算は限られてるでしょうけれども、十分な予算を取っておられるのでしょうか。この際散逸してしまうようなものを史料集として残すことも必要ですよね。以前には「福生誌覚書」というものをぼんぼん出して行くという手法を取ったんですよね。広報かなんかで、史料提供をあらためて呼びかけてみるというのも必要だと思うんです。そういったもので、できるだけ新しい史料を引っぱり出すというようなことが大切です。もう二五、六年もたってますからね。あるいは収穫がないかも知れませんけれども、呼びかけは必要ですかね。

福生の現代史はどう書くか

川鍋　私は現代を担当させていただいているのですが、いま人口動態などの資料集めをしているんですけれど、うまい具合にいかないですね。町誌では人口動態、特に社会移動を含めて非常に細かく出ているなあと思っているんです。町誌にのった資料以外の基礎的なものを、たぶん、どなたかお持ちになっていられるんではないかと考えているんですが。どなたがこれをおやりになったか、あるいは、どんなふうにおやりになったかおきかせいただければありがたいのですが。

田村　私がやったんですがね、川久保先生という女の先生が学校を卒業するときに出した論文をお借りしたんです。もう一つは福生中の小林正芳先生が研究されましたものをお借りしました。それから森田潤三さんが産業関係のでかい地図をつくられたんです。それも利用しました。

川鍋　その地図は、現在森田さんがお持ちですか。

田村　お持ちじゃないかと思うんですが。

坂上　それから現在の資料としては、福生第二小学校に並

木嶋雄という校長先生がいましたが、その先生が『西多摩郡郷土教育資料』という手書きのものを残されたんです。昭和の初期からのものですが。どこかにありますか。

川鍋　並木先生のお宅には残っている可能性はあるんですか。

唐沢　学校に保存しておいたのですが、その後はちょっとわかりません。

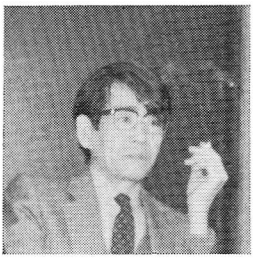
岩下　並木先生の家に行けば、あるかも知れませんよ。

唐沢　どうですか。あの先生は自分で原稿をガリ版きって、必ず五〇部刷り、皆に配ってしまうから。

岩下　生前にいろいろみせていただきましたが、とってあると思います。

川鍋　なかなか地理の現代で、人口などをきちんと入れているところが少ないのですけれど、そういう面でこの時代にどなたがおやりになったのか感心させられたんです。

北原　宮岡先生、自然科学部門からは何かございませんでしょうか。



宮岡　特に自然関係はお調べにはならなかったんでしょうか。当時とすると、なかなか実態調査というのは難しかったんでしょうね。スタッフの関係もあるでしょうし。最近は生物にしても地質にしても広い面で資料が積み重なってはきております。

唐沢　とにかく、教育長さんからは早くやらなきゃ、といわれるし、みんな現場を持っている状態でやるんですからね。本当に大変だったろうなと思うんです。辞めた田村さんという事務局をやっておられた方などは苦労されました。予算がないとか。

岩下　宮岡先生ね。福生第五小学校の野鳥の記録がずいぶんございますね。あれは参考になるのですか。

宮岡　なりますね、長期的ですので。定期的でかつ長期ですから。

岩下　それから植物に関しても、福生第四小の栗原先生がやっているはずなんですが。また前に福生中学にいた内田という先生が、何か残していると思いますが。福生珠算学校の月報はおもしろいですね。あれは役に立つところがあるんですか。

それから思い出したんですけれど、各小学校で九十周年記念とか、百周年記念とかで記念誌をつくりましたね。ああいうなかにも昔の生活のことが書かれていて、案外楽しいですね。

新井　各学校には「学校日誌」というのはあるんですか。明治・大正・昭和の頃のものが残っていますか。

岩下　五年位だけど、もっと古いのもとってありますよ。

あれをみれば児童数なんかわかります。

宮澤　でも改築したりすると整理しようということになります。

藤谷　一小と二小には確かあると思いますね。

宮澤　学校日誌でなくとも、たとえば児童数や教職員数は、「教職員名簿」があるんです。これには学級数、児童数、教職員数など全部入っています。吉野の学校なんか昭和一七年頃からとってあります。

小野沢　三九年ですか。一小の『九十周年記念誌』をやってもらったんですが、これには生活について古老からの原稿をかなりいただきました。

新井　もう一つお聞きしたいんですけれども、近代史ということになると戦争の問題があると思うのですが、従軍日記みたいなもの、日清・日露とか、大平洋戦争まで含めて、その村や町から出ていった人達の残した日記ですが、非常に貴重な資料だと思うんです。福生の中でそうした従軍日記などをどこかでご覧になったことはございますか。

高崎　軍事郵便は、長沢の橋本旅館に日露戦争のときかなんかのものが三つぐらいあります。

藤谷　昭和三〇年頃は、そういうものを集めるとだいたい変に思われるような時代でしたね。できるだけ遠ざけていましたね。できるだけ主観的に危険だなと思われるのは、みんな避けて通ったんではないですか。

新井　それは基地の問題なんかもそうですか。

藤谷　基地の問題などは、少し書いただけです。

宮澤　それから道徳の時間や勤務評定の問題などもありましたが、ある程度書きました。

誰に読んでもらう市史をつくるか

北原　予定している時間をそろそろオーバーしてまいりましたが、最後に何かお気付きの点がございましたらどうぞ。

藤谷　私は大変生意気のようですが、やっぱり対象は何であるかということを、はっきりきめて、つくってもらいたいと思います。私達のときには、できるだけよそから転校してきた先生達が子供に教えるのにはどうしたらよいか、というような視点でやろうと考えたわけです。一般の市民がこの程度なら読めるんじゃないかというようなもの、後世に何らか役に立つようなもの、これらを目標に考えてみたわけです。今回も誰を目当にして、誰に読ませようとするのか、あるいはこれが福生の実体なんだというようなものをつくるのか、そうしたことを考えてつくってほしいと思います。あまり大きなものをつくっても読みずらいですね。博士論文が並んでいるよう

な大きなものをもらっても、本当に読む気がしないです。でも、そういうものも大切ですから必要があるという気もします。それと同時に市民にも、こういう真実があったのかと、よろこんでくださるものがあればいいと思うのです。ですから、二つに分けてつくった方が、大変いいんじゃないだろうかと感ずるんです。書くときにちょびっと考えにいれていただければ幸いです。対象を何に置くかということも考えて、つくっていただいた方がいいと思います。

宮澤　何部ぐらい予定しておられるわけなんですか。

内田　まだ検討しておりません。

宮澤　各世帯に少なくとも一部配るというんだったら、どの市民も読めるものが必要ですし、専門的なものならば、部数はうんと減らしたっていいんじゃないかと思います。

内田　ただいま先生方からいろいろなご指摘をいただきました点につきましては、昭和六五年ぐらいを目途に作業を進めてまいりますが、参考にさせていただき、市民がよろこんで読んでいただける新しい市史の編さんをめざしていきたいと思います。予算等の問題につきましては、先生方と相談申し上げながら計上させていただきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

北原　だいぶ時間もまわってしまいましたので、そろそろ終わりにしたいと思います。

今日は原始・古代の和田先生と、民俗の河上先生がご都合で欠席され、その辺についての議題はちょっと少なかったようですが、遺跡の発掘調査も進めつつありますし、また民俗調査も各地で始まっている状況です。今後ともいろいろなご協力、ご指導をお願いしたいと思っております。まとめることもできないぐらいいろいろなお話しをいただき、ずい分勉強させていただいたと思っております。ひとまずこの辺で座談会は終えさせていただきます。どうも大変長い時間、ありがとうございました。

内田　非常にお忙しいところ、長時間お話し合いをしていただきありがとうございました。お話し合いの中で非常になつかしい話がでてまいりましたが、市史編さんの参考になるものと思います。これからの編さんに当たりましては、本日いただきましたご意見やご指摘を肝に命じまして、作業を進めてまいりたいと思います。これからも、このような機会をもうけまして、ご指導を賜りたいと思っておりますので、よろしくお願い申し上げます。

（85・3・28　福生市役所会議室にて）